

「いつかどこか
遠くの向こう」

2010/09/14

ぎいぎいこ、ブランコが見えてくる前からもう音がしてて
どうせそんなことだろうとは思ったんだ。

案の上だ。

ブランコは風もないのに絶好調に揺れていて、その上には
やたらとノリノリなオッサンが乗っているのだった。

太子だった。

探していたのだから見つかって良かったのだけれども、な
んとも言いがたい脱力感に襲われて僕はため息ついてうずく
まった。

もういやだこんなおっさん。こんな上司。

時たま僕は選ぶ職場を間違ったんじゃないかって、思わな
くもない。

それでもよいしょ、とどうにか気合を入れなおして、まだ、
僕に気付いてない様子の太子に怒鳴りつける。

「おい、太子、このバカ！ 何度逃げたら気が済むんです
か？ さっさと戻って仕事しろ！」

「あ、妹子だ」

ぐるりと、ブランコの備え付けられた大きな木を回り込ん
で太子の正面に行った。

太子は僕にひらひら手振ってくるけれど、ここで優しい顔
を見せてはいけない。とことんわかりやすく僕は、怒ってま
すよ、の意思表示として腰に手を当てて睨みつけてみせる。
まるで犬のしつげだ。

それなのに太子に反省の色はないのだから、本当に嫌にな
る。嫌になるといかあきれ返るといふか。途方にくれると
いうか、もう僕はどうしたらいいんだ。仕事しない上司に仕
事をさせる方法なんて、教えてもらったこともない。

太子は陽気に笑ったまま、ご機嫌に揺れるブランコ板の上
に両方の足を乗つけた。

そのまま紐を掴んで立ち上がって、数回こいで。

「どう！」

「……………んの、バカ！」

そのまま一番高い地点、一番前に振れたところで跳びやが
った。

両手なんか上げて、ノリノリで、何のためらいもなく。
太子の体がきれいに吹っ飛んで、僕の頭上を超えて行きそ

うで焦った。思ったよりも遠い、高い。たかが太子だつて甘く見てたから一気に背中に冷や汗をかいた。

重りのなくなつたブランコの紐と板がめちやくちやに暴れるけどもうそれどころじゃない。

あわてて地面を蹴つた、追いかけて、落下点に回り込もうとして失敗した。

急に力をかけたせいで足を滑らせて、転ぶ。

でも位置だけはちょうど良く、太子が降つてきて僕は見事下敷きになつた。

本気で死ぬかと思つた。息とか、止まるかと。

つて言うか正直止まつた。

物凄く痛い。多分おなか。わかんない、転んだときに腰も打つたから。

もう何がなんだかわかんない状態でそれでも太子が上にいて、僕は衝撃でべちやんにされた腹に空気を吸い込もうとしてできなくて咳き込んだ。太子に座り込まれたせいだ。この人は僕に殺意でもあるのだろうか。なんだか、あまりの苦しさや痛みに涙出る。

何度も咳き込んで、その勢いやら腹筋やらを使いながらも何とか呼吸を試みた。筋肉が動くかと太子がおお、と楽しそうにするけれどこっちは楽しくもなるともない。睨みつけるとようやく、太子は僕の体をはさむようにして膝立ちをして、それでようやく、息が出来た。

大きく呼吸をして、肺に、腹に空気をためる。

冷や汗どころか、全身にびっしりと汗をかいていた。

涙目にぼやけた視界で、逆光になつてよりいつそう見えづらい太子の影が片手を上げた。

「よっ！」

「ふざけんな！」

反射で怒鳴っていたが、腰を打つたから大声が響いた。やっぱ痛い。何をしても、何をしなくてもどうしたつて痛いのだった。痛くてちよつと当分動けそうにない。それでも太子は僕の上に乗つたままで、不親切なことこの上ない。

どうしてどいてくれないのだろうか。

むしろどくのが常識だろう。

また太子が腰を下ろしそうになつたので、それだけはおもふに勘弁して欲しくつて何とか肘を立てて力を込めて、起き上がるうとしたらしぶし膝立ちに戻つてくれた。

どうか本当にどうしてそこから動かないんだ。

もう抵抗する気力も体力もなく、仕方なく僕は脱力して、その場に腕を投げ出して転がつていた。

どうしてこんなことになつていゝんだらうつて考えて、視線を太子に移す。

何がそんなに楽しいのかへらへらと無責任なその表情が腹立たしくて、でも実はそこまできちんと見えているわけではない。昼近い太陽は真上で太子が影で、よくわからない。

むこうの日差しが眩しくて、僕は右腕を持ち上げて手の甲を目のあたりに落として、横を向いた。

ブランコは、いつの間にか大人しく停止していた。

「……………退いてください、太子」

「えー？」

ふざけてるみたいな声だった。きつとふざけているんだろうな。

太子はにやにや笑って、体を動かした。僕から離れるのではなく、もつとくつつくように。

べつたりと、僕の上に寝そべるようにくつついてきて、僕は文句を眉間のしわにこめるけれども太子はお構いなしだ。

僕の上に寝そべって、太子がばたばたと交互に足を遊ばせる。

僕はもがいて、太子を振り落とそうと思って、

「もつと遠くまで飛べると思ったんだよ」

止めてしまった。

太子が、そんな、こと言い出すから。

静かな声だった。ふざけてはいなかった。ふざけようとして、軽くし損ねたような中途半端な声だった。

僕は横を向いたままで、答えなかったから、宙ぶらりんになる。

宙ぶらりんの言葉を太子がぼつりぼつりとゆっくり繋げている。

「どっか遠いとこ行きたいんだよねえ。海の方とか、見たこともないところとか……………。思うだけなら近いのにな、こつからじゃ、海だつて見えやしないもんな」

太子が真つ直ぐに伸ばした手が、僕の鼻先にかざされている。

太子は僕の胸のあたりにもう一方の腕を折りたたんで、あごを乗せていた。

ちよつとだけ、頭を持ち上げるようにすると太子と目が合う。

伸ばした指の先を見るようにして、じつと、真つ直ぐに、僕は見つめられていた。

「また行きたいなあ。行けたらいいのになあ、お前と」

僕はああ、と気付かれないように息を吐いて、また全身から力を抜いてしまって。

頭も地面に落としてしまって、もう太子は見ないで。でもぴつたりくつついた体から太子の呼吸の速度や、心臓の音なんかを知ってしまって。

何もしませんが、という意思表示のように両腕を真横に伸ばして、目を閉じた。

次の隋への遣いの計画が立っていた。

また僕が、という話が出ているのも、そしてその方向で話はまとまりそうだということも知っていた。

そしてきつと、この人だつて知っているのだ。

当然か、僕が知っているくらいなのだから。

僕が知っていて、この人が知らないことなんてないのだから。

でも、その逆はきつと、少ない。

そういうことに、することにした。

また、一緒に行きたいなつて言う、その思いに僕は気付かない。

気付かないようにする。

「勝手に、したらいいじゃないですか」

望むようにすればいい、そう、答える声があまりにも薄情で笑えもしない。

答えはなかった。

代わりに太子は身を起こした。

それからじりじりと膝立ちで、移動して。

そつと僕の肩を推さえつけて。

身を屈めて、額に唇が押し付けられた。

とつさに目をつむってしまったことが恥ずかしくて、近い

太子の目を睨みつける。

まるで空つぽみたいな目をして、しかしそれは何か押し殺すときの表情だと気付いていて、また僕は気付かない振りをした。

太子はそれについてはなにも言わない。

太子の言わないことは僕の知らなくていいことで、僕はじつと、太子を見た。

「……………大丈夫」

まるで大丈夫でない、かすれたような声で言っていた。

「何も、悪いことは起こらないよ」

何も、と。

念を押すように祈るように。

願いのように。

何回も。

ようやく退いてくれた太子を殴りつけようか悩んでみて、結局、持ち上げた手で髪をかきあげた。

転んでいたで頭の後ろに土がついていてそれを払う。ほらほらと、乾いた感触が指先に移った。

「無事に帰ってくる、な？ お前みたいな、運だけは異様にいい筋肉お化けは絶対だ！」

「……………運だけは、ってなんだ失礼だな。頭だつていいですよ、僕は」

「えー、そんなことはないだろ」

「失礼だな！ なんだあんたに否定されなきゃなんないんだよ！ ついでに言えば要領だつていいよ」

「お前ただけナルシストなんだ……………これで器量良しとまで言い出したらすすがに私一步ひくぞ」

「器量もいいでしょう、見て分かりませんか？」

「げええー」

すかさず一步、後ろに下がって見せた太子はもうふざけていて、僕もそれに合わせて腕を伸ばして、足を殴りつける真似をした。

「ん、ほら」

「……………どうも」

太子が手を差しのべていた。遠慮せずはその手を掴んで、ちよつと余計に力をかけてみたら太子が転びそうになるので笑った。

手を掴んだままで、ほとんど自力で立ち上がって、でも手は離さないままだ。

「またべつたべた……………手汗とかそういうレベルじゃなくないですか」

「ななななにをう！ 潤いたつぷりの聖徳太子様の手だぞ！？ もう一週間は手洗えないって言つて喜びにむせび泣く場面だこは！」

「帰つたらすぐ洗いますんで。やつぱり清潔が一番ですよね」

「きい！！ なんか、普通のこと言われてるのに遠まわしに馬鹿にされた気がする！」

並んでいれば太子はもう逆光じゃなくて、いつも通りで、確かに僕は安心した。

はいはいすいませんでした、とおざなりな謝罪を吐いて流そうとして、余計に太子に駄々をこねられる。

「もう……………じゃあ、どうしたらいいんですか？ どうし

たら大人しく仕事してくれるんですか」

「もつと別の仕事なら、もうちよつとくらいやる気出るのに。あそうだ、もいつこくらい寺建てない？」

「馬子様とかに相談してみてくださいよそんなことは。理由と目的さえはつきりしていれば、それが国の為になるのなら、反対されないんじゃないんですか？」

「お前他人事だと思つて簡単に言いやがつて………大変なんだけど、馬子さんと会話するのは！」

「ええー………太子と話すよりは楽ですけど」

「ぎゃん！」

そう呻くなり太子は駆け出して、どうするのかと見守つていとまたブランコに乗り出した。

しかもまた立ち漕ぎでぐんぐん勢いをつけていくものだから、それでも無理に近付いて止める気にはなれなくて、仕方なくまた跳んだらぶつ飛ばすぞ、と脅すことしか出来なかつた。

べー、と太子は舌を突き出して変な顔をする。

バカにしてるんだとしたら覚えておけ、と思つた。

「妹子！ よおおく、聞いとけよな！」

「つ、そんな、大声出さなくても聞いてますつてば！」

「私はな！」

ぐんぐん、がんがん、太子は膝を使ってブランコを漕いで

行く。

高く高く。

——遠く、遠く。

「ずっと、ここで、待つてるからな！」

どんなに高く漕いでも遠く漕いでも落ちてしまつて。どんなに想像したつて海さえ越えられないけれども。

「摂政自らお呪いしてやつたんだぞ。絶対、絶対元気に帰つて来いよな！！」

遠いとこ行きたいと言つたその口で、ここで待つているという。

そんな太子は風を切つて行つたり来たり。

眩しいくらいの笑い方だつた。自信に満ちて何の疑いもない顔だつた。

少なくともそんな風に、見せようとしている表情だつたら。

僕は安心してしまった。

「僕を誰だと思ってるんですか？」

とことんわかりやすく僕は、呆れている、もしくは当然じゃないですか、そんな意思表示として腰に手を当ててわざと偉そうに、胸を張って、言ってる。

絶対に帰ってくる。

あんたのためなら、どんな困難だって乗り越えて。

好ましいし、と僕は気合を入れて、さあこいとばかりに太子を見た。

ブランコが前に振り切れる。

一番高いところで楽しみに跳んでみせる太子に腕を差しのべた。

そう、あんたが言ってくれるなら。
どんな運命だって退けて、ここに。

「ねえ、また、飛んでもいい？」

「……………どうぞ」

仕方ない、僕はちよつと離れてから、わかりやすくめいっつぱい、太子に腕を広げて見せてみた。

「もういつぺん、ただだからな」

「……………うん！！」

今度こそきちんと受け止めよう、そうじゃないととても格

「あめあめ」

2010/10/17

雨が降っていました。しとしと、しとしと、細かいけれどもひっきりなしに、灰色の空から落ちてきます。

雨合羽を着た子供が一人いました。お母さんに用意してもらったのでしょうか、雨合羽だけでなく、長靴もはいて傘も持っています。これでこの子が濡れることはないでしょう。薄赤色の雨合羽が、雨の日でも遠くから目立っています。黄色の長靴で水たまりを蹴りどばして、どうやら機嫌は少し悪いみたいです。もしかして雨が嫌いなのでしょうか。若草色に、緑のデフォルメされた蛙柄の傘を傾けて、空を見上げて深々と、ため息をついていました。

その後ろからもう一人、子供が走ってきました。こちらの子は何も持っていないませんでした。雨合羽や長靴はおろか、雨の日だっていうのに傘もさしていません。全くもって無防備でした。それでも気にした様子はありません。その子は水たまりを見つめるなり一目散に駆け寄って、両足をそろえて飛び込みました。ぱしゃん、と軽い水の音を立てて水の粒がはね散らかりました。頭のとっぺんから足下までびしょぬれで、それでもとてもとても楽しそうに笑い声を上げました。

水たまりの音と笑い声にびっくりしたのか、雨合羽の子が後ろを振り返りました。

けらけらと笑うびしょぬれな子はもう水たまりには興味ないみたいでした。次は道の端にしゃがみ込んで、そこにいた蛙に何やら話しかけています。

雨合羽の子が名前を呼んでびしょぬれな子の元へ近づいてきました。

びしょぬれな子は雨合羽の子の顔を見て、うれしそうに笑いました。ぎゅつと目元が下がっていて、安心しきったような表情でした。

雨合羽の子は息をのんで、ついでに少しだけ顔を赤くしましたが、びしょぬれな子は全然気づきませんでした。

二人はそれからいくらか言葉を交わし、雨合羽の子がびし

よぬれな子に、押しつけるように傘を差し出しました。緊張しているのか唇をぐっと引き結んで眉がつり上がって、怒ったような顔になっていました。

びしょぬれな子は困ったように、傘を差し出してくる手をやんわりと押しやって、首を横に振りました。

途端に、雨合羽の子が泣き出しそうな顔になりました。

それを見てさらに、びしょぬれな子は困ってしまいました。

雨合羽の子はうなだれてうつむいてしまいました。
びしょぬれな子はどうしたらいいかわかりません。

ゲコ、とそんな二人にはお構いなしに、蛙の鳴き声がしました。

びしょぬれな子を見るとそこにはもう蛙はいませんでした。

かわりに草むらが揺れたので、もうどこかに行つてしまつたのかもしれませんでした。

しとしとと雨が降っていました。

雨合羽の子にもびしょぬれな子にも同じように雨は降り、雨合羽の子は濡れなくて、びしょぬれな子はもつともつと濡れていきました。

気を取り直すみたいにして息を吸い込んで、雨合羽の子が顔を上げてびしょぬれな子を見ました。その睨むみたいな目つきにびしょぬれな子はびくりと肩を揺らしましたが、雨合羽の子は気付いてないようでした。

僕はカッパがあるから、大丈夫だから、濡れないから。そんなことを、雨合羽の子は言いました。

大丈夫だよ、私もう濡れてるし、いいよありがとう。そんなことを、びしょぬれな子は言いました。

それから二人の間でちよつとした押し問答が始まりました。貸すよ、いいよー、貸すって、いいってば。雨合羽の子は傘をぐいぐいと押しつけて、びしょぬれな子が手のひらでそれを押し返します。

そんなやりとりは長いこと続きました。

どちらの子も同じくらいに頑固で、同じくらいに不器用で、仕方がないので雨合羽の子は傘を押しつけることしか、びしょぬれな子は傘を押し返すことしか、できませんでした。

お互いに相手のことを思つての行動のはずだったのに、どうしてかどちらとも、それをうまく相手に伝えることはできませんでした。

ただただ二人の間で揺れるカサの蛙がのんきそうに雨にうたれていました。

このまま永遠に続きそうなやりとりだつて、必ずどうにかなるものです。

そろそろ二人とも疲れてきてしまった頃。

そうだ、じゃあね……………

ふとびしよぬれな子がいいことを思いついて、雨合羽の子にその思いつきを話しました。

びしよぬれな子は自分の思いつきが大変すばらしいものかと思えて、満面の笑顔で話します。

貸すって言ってるのに……………

雨合羽の子は少し不満げでしたが、最後にはしぶしぶ頷いて見せました。

雨合羽の子とびしよぬれな子は傘をさしています。

二人の間で緑の蛙柄の傘が開いています。

びしよぬれな子から傘を奪い取って、雨合羽の子が傘を持つていました。

私がさすのになあつてびしよぬれな子は思っていました、雨合羽の子がどうしても傘を持ちたいと言ったので、任せる

ことにしたのでした。

びしよぬれな子は傘に雨が当たる音を聞きながら、なんだか楽しくなつてきて歌を歌い始めました。

雨合羽の子は何も言いませんでした。

傘はほとんど、びしよぬれな子の上にあります。

だから雨合羽の子の体半分くらいは雨に打たれていました。びしよぬれな子はそれに気が付きませんでした。

雨合羽の子はそれを気にしませんでした。

しとしととずっと、二人の子供の上に雨が降っていました。道ばたで時折ゲコ、と蛙の鳴き声が聞こえます。

びしよぬれな子は雨の音を聞いて、歌を歌っていました。

雨合羽の子は雨の音を聞いて、歌を聞いていました。

雨合羽の子にもびしよぬれな子にも、同じように雨は降ります。

一本の傘の下で、同じ音を聞きながら、二人はゆつくりと歩いていきました。

二人の子供が一本の傘を仲良くさして歩いていきます。

一人の太子が木の下で雨宿りしながら、そんな二人を見ていました。

子供の一人が何か歌を歌っているみたいでした。

何の歌かはわかりませんが一人の太子は何だか楽しくなってきた、同じように歌を口遊んで、それから木を見上げました。

ばらばら、ばらばら、雨粒が木の葉を揺らして音を立てています。

たまに水がかたまりになって落ちてきてびっくりしますが、おおむね穏やかな時間でした。

遠くから名前を呼ぶ声がしました。

ゆったりと笑う口元をさらにつり上げて、一人の太子は頭の後ろで組んでいた手を解きました。

心の中でゆっくりと五つ数えてから返事をします。

ぱしゃ、と雨に濡れた道を蹴って駆け寄ってくる音がどんどん近づいてきます。

もう五つ、心の中でゆっくりと数えて、もったいぶるように振り返ります。

思った通りの人がいて、一人の太子はそれはそれはうれしそうに笑いました。

一人の妹子が赤い傘をさし、水色の傘をもう一本手に持って、大きな木の下にやってきました。

一人の妹子はゆっくりと、眉間にくつきりしわを刻んで視線を鋭いものにしました。

何か言いたげに開かれた唇は、しかし何も言うことなく引き結ばれました。

一人の妹子はそっぽを向いてしまいました。その目元がほんの少しだけ赤いことに、一人の太子は気付いていました。

ねえねえ、と太子は妹子の腕をたたいて、それから遠くを指さしました。

促されて妹子も、伸ばされた指の先を目で追いました。

「微笑ましいいなー。なんかいいよな、ああいうの」

「そうですか？ 濡れますよ、一本じゃ。まあ、合羽があるからあの子は大丈夫でしょうけど」

「そこはなお前、『じやあ僕たちもいっしょに傘に入りましょうか』って言うところだったんだよ気付けよ！ 気付くもんだ、ふつうはな！」

「はいどうぞ太子傘です。ご心配なく、もう一本持つてます」

「やつぱりねー！ お前つてばそういうやつだよな。準備いいのはいいけどこういう場面じゃむしろモテないぞ、チャンス台無しだぞ」

「大丈夫です。太子相手にチャンスいらなだけで、必要なときはもつとこううまくやりますから」

「なんでだよ！ 私以外に誰とのチャンスが必要だつていうんだよ！ 私相手にもつとちやんとうまくやれつてば！！」

「はいはい。バカなこと言つてないで早く帰りますよ。……」

「……ほら、こんなに冷えてる」

「ひやつ……………」

「……………変な声を出すな」

「おお、妹子の手、ぼつかほか！ 何だお前、天然ホツカイロか何かか？ はっ、さては妹子、前世は湯たんぼだったとか……………」

「そんな前世ないよ！！」

「よし、今日からお前には私専用の抱き枕を命じるぞ！ 毎晩私の布団にすること！！」

「ほげ〜〜！！ なんかわななこと言い出したよこのオッサン！ そろそろこれセクハラだろ？」

「あ、摂政命令なんですよしく」

「パワハラだった！ もういやだこんな職場！」

「言うこと聞かなかつたらそうだな……………毎晩妹子が寝た頃を見計らつて、湯たんぼの中身を氷水に変えてやる」

「妙な嫌がらせはやめろ！ あ、でも僕湯たんぼ使わないんだつた」

「なんだと！？ 湯たんぼなしで眠れるとは……………さすが私が遣随使に選んだ男。やつぱり自動発火装置が付いているんだなんて恐ろしい子……………！！」

「物騒なこと言わないでください！ この場合発火じゃなくて発熱です！ 火事になったら大変だろ！」

「何なに、装置は正解なのか？ やつぱり君、アンドロイド？」

「……………」

ふと妹子は押し黙り、じつくりと太子を見つめて、じつくりと見て、太子が照れて頬をうつすらと赤く染めて、はにかむようにうつむいて、それからまた顔を上げて、まだ妹子がじつと自分を見ていることに気付いて、じわじわと不思議そうな顔になって、

「……………なあ、私の顔なんかついてる？ それともこのパーフェクトなフェイスに釘付けになって石になっちゃったとか！ 参ったなこれ、全く罪な男だぜ！」

なんて、一人でしゃべりだしてくすぐったそうに笑いだして、それでも妹子が何も言わないのに不安になったのかひとしきり自分をほめちぎった後、

「な、なあなあ、ねえ妹子なんで何も言ってくれないの？ 本当に石？ 風邪引いたとか？ なんかの病気？」

しきりに妹子を心配して泣きそうな顔になったのを見てようやく、

「……………はああああ……………」

肺の中どころか体中の空気を抜いてぺっちゃんこになってしまいうような勢いで、長々と、深々と、ため息をつきました。

「い、妹子が壊れた……………。あれか、アンドロイドだから……………雨に弱かったんだな」

「違いますから。呆れてるだけですから」

「え、誰に？ はっ、まさか私……………なわけないか」

「正解です。もういいです。帰りましょう」

「そうかそうだよなー……………あれ今正解って言った？ 気のせいだよな？」

「もうそれでいいですから」

妹子はもう太子と会話する気はないみたいで、背中を向けて、木の下から一歩外に踏み出しました。

置いていかれまいと、あわてて太子は妹子が持ってきてくれた傘を開きます。

雨の日に、木の下で、太子の上でだけきれいな青空が広がりました。

「……………あ」

妹子は太子に聞こえるように大きめの声で呟いて、一歩下がって木の下に戻ってきました。

そして今までさしていた傘を畳みながら、真面目くさった顔で太子を見つめます。

そしていたって真剣な表情で、こんなことを言い出すのでした。

「傘に穴開いてました。これじゃ使いものになりません。だからすぐく気が乗らないんですけど、仕方ないからそつちの傘にいつしよに入れてください」

最後に、いやならいいですけど、と付け足して、妹子は口を開きました。

代わりにぼかんと、太子は口を開けて妹子をまじまじと見つめてしまいました。

そんなわけではないのです。だって妹子は、その傘をさしてここまでできたのですから。

それくらい簡単なことでした。そんな簡単なことくらい、すぐにわかることでした。

太子は間拔けな顔でぼかんと口を開けて、妹子を見つめて、妹子は目を逸らさずに真っ直ぐに太子の視線を受け止めていて。

ぱらぱらと、木の葉の上と太子の上の青空で、雨の音が鳴っていました。

ぼつん、とひとすじ水が妹子の頭の上に落ちてきたのが見えました。

妹子は不快そうに顔を歪めて、頭の上を手でこすっていました。

ようやく太子が浮かべることができたのは、情けないような、気が抜けてしまったような、そんなふにやりとした笑みでした。

「……………君さあ」

「なんですか？」

は目を開けることができませんでした。

「それってさ、うまいのか？」
「さあ？ 知らないですけど、ただ、太子がだまされてくれればうまくいくんじゃないんですか？」
「……………まったく、大したやつだよなお前って。さすが私
が」

「あなたが選んだ男ですからね」

「……………」
「そう、でしょう？」

太子は太子の顔を覗き込むように見つめてきました。

思いがけず近くに太子の顔があつて、思わず太子は後ずさりしそうになつてしまいます。

別にこの距離が嫌だとか、そういうことではなくて、なんと言ふか反射みたいなものでした。

す、と太子が自然な手つきで太子の頬に触れて指をすべらせました。

耳を包み込むように撫でられて、思わず太子は目をつむつてしまいました。

雨の日は少し肌寒くて、触れてくる手のひらがあたたかかったのようやく、耳たぶが冷たくなつていたことに太子は気付きました。

かすかに、唇に吐息が吹きかけられた気がしたので、太子

「何ぼけつとしてるんですか。雨なんですからさっさと帰りますよ。本当に、風邪引いたつて知らないんだからな」

「ほえ？」

間拔けな声を出して太子が目を開けると、いつの間にか太子の持つていたはずの傘を太子が持つていて、太子の頭の上で青空が広がっていました。

いつの間に傘を取られたのか、さっぱりわからなくて太子は目をぱちぱちさせます。

「ほら、早く」

太子はぶつきらぼうにそう言つて、少しかだけ歩き出しました。

大きな木の下から小さな青空が離れていきます。

太子はとつさに、太子に置いていかれないように足を動かしました。

太子が小さな青空の下に入ったのを確認したら太子はもう、太子を見ようとはしませんでした。

ゆつくりと、歩き出しました。

二人の間に広げられた小さな青空の上ではらばらと雨が歌っていました。

太子は唇を突き出すようにして、適当な歌を歌っています。

太子は妹子にびったりとくっついて歩いてるので、ときどき肩がぶつかりました。

いつもなら文句のひとつでも言いそうなのに、このときは、妹子は何も言いませんでした。

なので太子は思う存分、気の向くままに、雨音に合わせて歌うことができました。

ぴったりくっついて歩いていきました。

ちゅー、されると、思ったんだけどなあ。

したいって、言ったらこの子、怒るかなあ。

そんなことを考えて。

ゆらゆら、ふらふら。

ぶつかる肩がやっぱりあったかいような気がして、やっぱりこいつの前世は湯たんぽに違いないと太子は思いました。

だから家に帰ったらもう一度、お願いしようと思いました。何って、もちろん添い寝です。

そしたらあったかいんだろうなって思ったら、どうしても、太子は妹子といっしょにいたくなりました。

太子はこっそりと横を向いて、妹子の表情を伺いました、妹子は前を向いたまま、怒ってもいないし笑ってもいない、いつも通りの無表情でした。

妹子はうんって言ってくれるかな。怒るかな。やだな、命令だったらいいかな？ やだなあ、お願いしたら、うんって言ってくれたらそれが一番いいなあ。

太子は不安と期待をいっぱい胸の中に詰め込んだまま、さらに空気を胸いっぱい吸い込みました。

少し湿っぽくて、何だ懐かしい。

雨のおいが胸いっぱいに広がりました。

二人は、ゆつくりと歩いて帰りました。

ひとりの太子とひとりの妹子が、ひとつの傘を分け合って、二人で雨の中を歩いていきました。

太子は気付きませんでした、妹子の体半分はびしょ濡れでした。

妹子は何も言いません。

太子は歌を歌っています。

一本の傘の下で、同じ音を聞きながら、それぞれのことを考えながら。

「早く寝なさい」

2010/11/22

「ご主人様♪」

「間に合っています」

一フレームの素早さで玄関の扉を閉めた。我ながら完璧な反応だったと評価できる。

しかし太子の反応だつて早くて、閉まりきる寸前で太子が隙間に手を差し入れて、そのまま力比べになった。

いつもだったら、絶対に負けない。僕が勝つ。僕の方が絶対的に強い。ひよるもやしになんか負けるもんか。

でも今の僕ではなんとか開ききらないように耐えるだけで精一杯だった。そりやそうだ。本当だったらこうやって起きているのも辛い。

それでもやらなければいけないときというものがあると思う。

そう、例えば今とか。

「おまつ！ このびゅーていふるでせくしいな摂政を直視できないのはわかるがこの仕打ちはないだろ！！」

「直視できない理由は別だ馬鹿！！」

一枚のドアが軋みをあげている。壊れそう。でも耐えろ。耐えてくれ、お願いだから。

こつちとむこう、僕と太子でしばらく力比べという名の地の張り合いが続いた。

閉まりきらない隙間から少しだけのぞく頭が不吉すぎるて鳥肌が立つな。寒気がする。

「私がわざわざ見舞いに来たんだぞもてなせバカ芋！！」

「なに言つちやつてんのこの人！？ そんな趣味はありません！」

「どんな趣味だよ！」

何だかくらくらと目眩さえしてきそうだった。

いや、もとからだけどな。

結局むせて咳こんだ隙に玄関に上がり込まれた。

息苦しさとかそういうのとは別の意味で涙が出た。

「ほれほれ、無理するから」

「誰の………せいだ………!!!」

がつくりと玄関先にうずくまって咳が止まらない僕。優しく背中をさする太子。

何か間違っている。

「ほーら、病人はおとなしく布団かぶって世話されんしゃ

い」

「ぎゃーッ……!!」

力比べといい止まらない咳といい、本格的に消耗してぐったりしていたら軽々と抱えあげられて、悲鳴を上げたらまた咳こんだ。

もういやだ死にたい。死にそう。喉痛いし体は熱いし頭は重くてだるくてつらい。

いわゆるお姫様抱っこというこの体勢も死因の一つになりそう。案外人間は恥ずかしさで死ねるかもしれないと本気で思った。

「はっはっは、妹子は重いなあ」

「失礼だな標準だよ!」

非力な太子の腕は安定感というものが皆無だ。

ずり落ちそうになってとつきに目の前にあるものにしがみついた。

太子の首だった。

「何だか積極的だなお前」

よし、死のう、と僕は決意する。

僕の羞恥心を多量に消費して、どうにかこうにか無事に布団にたどり着くことができた。………無事か? 主に自尊心とかそういういたものが犠牲になった気はする。

対照的に太子は上機嫌に、僕を布団の上に寝かせて毛布をかけてくる。

もう抵抗する気力も体力も残ってなくてされるがままだ。これでもかとはかりに毛布を山盛りにされた。こんなどこにあつたんだよ。重たいくて暑苦しい。

非難の意を込めて睨みつけたやつた。やたらと達成感に浸って額の汗をぬぐっていた太子は、僕の視線に気付くと不意に頬を赤らめてはにかみやがった。

頭痛がひどくなる。

「ふふん、どうだサービスしてやったんだぞ。めろめろだろう」

「お心遣い痛み入ります。おかげで僕は瀕死です」

「そうだろうそうだろう。ただでさえ殺人的な私の魅力が倍増しだからな！」

「そういう意味じゃない……………いい加減気付け……………」

もはや僕の言葉なんか聞いちゃいない太子がその場でくるくる回ってみせた。

短めの青いスカートがふわりと円上に広がる。

見えてはいけないものが見えてしまった気がするけれどもそれはきつと気のせいだ。そう、僕は僕に言い聞かせる。それよりもまず、確認しなきゃいけないことがある。

「あの、太子。つかぬことをお聞きしますが」

「おう、なんだ？」

ぴつたりと回転を止めて太子が僕を見る。

一度目を閉じて深呼吸。そうだ聞く前に自分で確認しよう。

もしかしたら今までの僕の目の錯覚とか熱に浮かされた僕の夢とかで、実は太子なんかここにはいないかもしれない。そんな。

そんなけなしの期待を込めてゆつくりと目を開けるけど、残念なことにやっぱり太子は僕の部屋にいた。

ただし、僕的にはこれが一番の問題なんだけど、太子はいつものジャージ姿ではない。

じつくりと下から順に確認する。

まず、靴下。長い。膝の上まで隠すくらいで目がくらむようなまっさらな白。

そして次はなぜかスカート。あの、女の子が着てくると振り返り際に揺れたりするとほわっと心が軽くなるようなあれ。短めのがひらひらするのも長いのがふんわりするのもいいと思う。

けどオッサンが着ることに暴力に近い何かを感じるのは僕だけだろうか。

スカートは、いつものジャージと同じ色味の青い膝上丈。上に着ているものと同じ色と素材っぽく見えるからワンピースかもしれない。

そして大きめのフリルのついた、汚れ一つないこれまた真っ白なエプロンドレス。

首元には白い襟が見える。襟に結んだりボンは落ち着いた紫色。この人何枚服着てるんだろう。ちよっと構造がわからない。

いつも頭に乗せている冠は今日はなく、いつも通りに前髪をまとめて額を出して、白いひらひらしたものを代わりにつけていた。

なんだろう、これ。

なんていうんだっけ。

「……その格好、何ですか」
「んー？」

太子は、にこにこ上機嫌。

にこにこ笑ってまた、くるりと回った。

遅れてスカートがふわりと揺れる。

止まり、スカートの裾をちよこんとつまんで膝を屈めて首を傾げる。

「メイドさん？」

「何やってんだあんたは！」

毛布をちやぶ台返し of 要領でひっぺがして放り投げるといふ動作でとりあえず突っ込みの代わりにした。それでも気持ち治まらなくて勢いよく身体を起こす。ぐらりと視界が大きくぶれたけれど知るもんか。

手を突いて耐えて、ぐっと顔を上げて太子を睨み、びしっ
と人差し指を突きつけて叫んだ。

「ハウスス！！」

「えー？ せつかく来たのにな？」

「着てくんない！ 脱げ、今すぐ！」

「えー？ まだ明るいのに？」

「何の話だー！！」

ぜい、と大きく息を吸う。それが刺激になってまた咳が出る。
ああもう嫌だもう。

この人はここまでこの格好で来たんだろうかとか。
そもそもこんな服どっから仕入れてきたんだとか。

っていうか僕の状態をどっから聞き入れてきたんだとか。
なんでこいつに知らせたんだ誰だ言ったヤツ今すぐ出て来い怒らないから今すぐ来いとか。

思うこと言いたい事は山ほどあったのにばったりと布団に倒れこんで目を閉じた。

ぺたん、と太子がそばに座り込んで僕の頭をなでた。

「風邪なんだろう？ 私に任せんしゃい。ご奉仕して差し上げようじゃないか！」

「あなたのそのやる気はどっからくるんだ………」

「だってお前が困っているんだろう？ 力になりたいと思うのは当然じゃないか？」

笑ってるみたいいな声だった。ちょっと目を開けてみたらやつぱり笑っていた。

伸びてきた手のひらが額に触れた。汗ばんでいて気持ちが悪いだろうに。

太子の手のひらはあつたかいはずなのに冷えて感じられた。

僕の熱がずっと消えていくようで気持ち良かった。

「あんまりはしゃぐから」

「誰のせいだ、誰の……」

「私だろ？」

そうだよ。

離れていく手をさみしく思った。

きつと気の迷いとか、そんなものだ。

体調が悪いから弱くなってる。

きつとただそれだけだ。

「ご主人様、お世話するでおま！」

疲れたのは本当だったから目を閉じて答えなかった。

好きにすればいいのだ。

見舞いに来てほしいなんか頼んだ覚えはない。

でも本気で帰ってほしいとも、たぶん僕は思っちゃいないんだから。

残念なことに。

よーし、まずは氷枕用意するぞとか言って太子が部屋を出て行った。

うってかわって静かになる。

ほんの少しのさみしさに安心して、ようやくとうとうと眠たくなってくる。

このまま寝れるかな、という一歩手前でひどく大きな音が聞こえてきた。

ついでに情けない悲鳴。

「……………あんの、バカ」

ふらふらしながら立ち上がって音のした方へ向かった。

氷枕も満足に作れないで何をするつもりだったのかと本気で問い詰めてやりたい気持ちでいっぱいになる。

「大人しくしてくれればいいんだよ」

なんかもう、あの人、何かしてもらうよりももう開き直って布団に連れ込んで抱きしめて。

そのまま眠ってしまった方がよっぽど僕の体調は治る気がした。

風邪がうつっても知るもんか。

したら看病くらい、してやるから。

「なにやっつてんですか、もうう〜」

何をどうしたらそうなるのか、よくわからないが柵中のものに押しつぶされて埋まっている太子を引つ張り出して抱き上げた。

ちよつとふらつくのは仕方がない。びつくりしたのか、太子が首に腕を回してきた。

「うわ、ちよ、寝てろよお前」

「だったら大人しくしてください、もう」

お姫様抱っこは、体勢的にはおしいけれども強く抱きしめることが出来ない。

もどかしく思いながら、今更のようにじわじわと赤くなつていく顔をじつと見つめた。

どうしたって僕はこの人に弱いのだ。

だから慣れないことをするよりも、僕に甘やかされていれ
ばいい。

たぶんきつと、僕はあんたがいてくれるだけでいいんだか
ら。

今更照れて暴れようとする体を抱えなおして、どうしよう
もない僕と太子、その両方にため息をついた。

「看病してよ」

2010/12/07

さむ。

コタツに名残を惜しみつつ、本を置いて太子のそばに寄った。

太子の膝上に落ちた箱からティッシュを2、3枚一気に引き出し、乱暴に顔面に押し付ける。

「ぶっ」

「ほら、ちーん」

何事かをもごもごとうめくのはきれいに無視する。

逆の手で後ろ頭も固定してやるとようやく観念したのか、ずりずりと鼻をかませることに成功した。

落ち着いたところで適当にティッシュを丸めて放り投げる。ふちにかすりもせずにとんとゴミ箱の中に吸い込まれた。

おお、と呟く頭を軽くはたく。

「鼻はちゃんとかんでくださいよ。良くならないでしょうが」

「だあーって、めんどくさいし、鼻の下痛いし、疲れるし、頭痛いし」

「わざわざ保湿ティッシュ買ってきただろうが」

「痛いものは痛いんだよ。……………それに、」

「それに？」

唐突に太子がくしゃみをした。ぶえつくしよんと最高に盛

ず、と鼻水をすすり上げる音に、見もしないで手元のティッシュ箱を投げつけた。

悲鳴が上がったのできれいにぶつけることに成功したものと思われる。

そのまま暇つぶし用の本を読み続けていたら恨みがましい声が聞こえてきた。

ため息をついて、そちらを見る。赤くなった額で涙目の太子が体を起こして、じつとりとこちらを睨んでいた。

「痛い」

「知っています」

ずり、とまた太子が鼻をすする。

僕はもう一度ため息をついて、開いたページにしおりをは

大にオッサンくさいやり方で。

僕は手近にあった枕で自分の顔をガードする。

涙目の太子が何か言いたげに睨んでくるが、あまり怖くもないので効果はないし何も伝わってこない。

そもそも上目遣いで何を訴えようというのか。せいぜいすねた子供にしか見えないわけだが。

風邪のせいか熱のせいか、顔を若干赤くした太子がふい、とそっぽを向いてぼそぼそ言った。

「治んなかったらほら、あれだ、お前、ずっとそばにいてくれるだろう」

こちらを見ない太子の頬が赤い。

じわりとはつきりしてくるその色を見ているとずっと気持ちちが風いだ。

だからその気持ちのままに、表情に微笑を浮かべて答える。

「じゃあ、僕、帰りますんで」

え、とこちらを向く太子の頭を撫でて、いい子に大人しく寝ているんですよそうすれば勝手に良くなりますから、と告げてさっさと立ち上がり僕は帰ることにする。途中で本を回収することも忘れない。

扉を開けて廊下に出たところで腰がずんと重くなった。

そのまま一人分の重みを引きずってひたすら玄関を目指

す。

「ちよ、待てこら、は？ 何、何なの！？ この流れでそれはなくない！？」

「やかましい！！ こっちとら有給使って来てやってるつーのに治す気がないとかどんだけだよ！！」

「いやある、あるある、あるよあるあるありまくりだつて！！」

だから帰らんといてと哀れな声を、ええい邪魔だとばかりにひっぺがす。

べちゃ、と比喩でなくそんな音を立てて太子が床にはりついた。

ふん、と鼻息荒く足音高く、僕は廊下を突き進んで玄関でくつを履いた。

それじゃあお邪魔しましたーと一声添えてドアを開けて外に出る。

………出ればよかった。もう、それだけだった。

それなのに僕はどうしてもそのドアを開けることができない。

太子は追つてもこないし呼び止める声もしない。

さんざん悩んで、迷って、面倒くさくなつて苛立った。

なんなんだ僕は、と自分に舌打ちをしてもう一度くつを脱ぎ捨て家上がる。

見ると、太子は叩き落とした地点にうずくまって、背中を

丸めて手で口元を押しさえつけていた。

咳を無理矢理我慢しているような力の入り方で、時折肩が揺れるのを見て考えていたことが全部吹っ飛んだ。

慌てて駆け寄ってそばにしやがみ込む。

「大丈夫ですか!？」

背中を撫でる。触れた部分がひどく熱い。ああくそ、悪態を飲み込んで顔が歪む。

元氣そうに振舞うわりにこの人は正しく病人で嫌になる。本当は心配で心配でたまらないのに、やさしくして甘やかしてやりたいのに、不意の一言にいちいち動揺して乱暴な態度を取ってしまう。

未熟な自分が心底嫌いでたまらなかつた。

自己嫌悪を飲み込んで、ごまかすように震える体を抱きこむと、ただたどしい仕草で胸元をつかまれますがりつかれた。ぜえ、と息を吐いて、うつむいてた太子が顔を上げて僕を見る。

近い距離で僕を見上げてくるその表情は、苦しげなものにはつきり不敵に笑っていた。

「捕まえた」

にやりと、笑う。

苦しげに歪めた表情でも視線が強く僕を射抜く。

つられてひくりと頬を歪ませ、それでも負けた気持ちにならないのは嫌で虚勢でもいいから僕は何とか不機嫌を取り繕う。

いつの間にかどくどくと、心臓がうるさくて体が熱い。

風邪がうつったか。不安のせいか。触れ幅の大きい感情のせいか。

太子のせいだ。

「あんたは、ずるい」

とつさにそんなことしか言えなかつた。

ぎゅつと目をつむり一度顔を背けて太子は咳き込んでみせる。喉を傷付けるような音に不安が募る。

それからまた、ゆつたりと目を細めて太子は僕を見る。

「嘘じゃない。ほんと、辛いんだからな」

「わかります。……………わかりました」

「お前がうつしたんだからな？」

「わかってますよ。悪かったです」

「謝んなくていいよ。でもさ、ちゃんと」

あごを上げて、心底楽しげに太子は笑った。

まっすぐに、僕の目を見て。

「責任とってよ」

突如湧き上がった、暴力的なまでに強い感情を目をつむってやり過ぎした。

やさしくしたい。あまやかしたい。

本当は僕はこの人の事を、うんざりするくらいどろどろに甘やかして、そしてもう僕しか見えないくらいに、僕なしではいられないくらいに、駄目にしてしまいたいと思っっている。その気持ちがあもうすでに、僕の太子への依存の証明みたいなものだ。

あんたなしではいられないくらいに強く深く、僕はあんたを想っている。

そんな弱さをいちいち思い出させてくるあんたが大嫌いではないことをしたくなる。

どうしたらいいのか、どうしたいのかもわからない両極端の感情に苛まれて、ぐらぐらと揺さぶられる脳髓がそろそろ限界で僕は苦しい。

たとえ嘘でも、どうでもいいというような無関心を装っていなければ、やっていられないくらいには。

そうじゃないと僕は、この人に、何をしてしまうのか自分自身想像がつかない。

胸元にすがりつかれたまま、太子の膝の裏に手を差し入れてそのまま抱え上げた。

寒い廊下は体に障る。

僕だっってこんなところよりも、暖かいコタツのほうがよっぽどいい。

僕に看病させておいて、治らなかつたら、怒りますよ。任せとけ、と全然頼りにならないような顔で太子が言っ、咳き込んだ。

ため息を隠さずに、馬鹿は風邪ひかないはずなのに、と咳くと腕を振り回して暴れるから、落としますよ、その一言で大人しくさせてずり落ちそうになる体を抱えなおした。